表 5-2　基本編チェックシート　気になっていることの内容

・奥様が施設に入所している。認知もあるらしいが、週 1 回ぐらいは通っている。耳が遠いのに、一人暮らしなので補聴器を外していて、殆ど聞こえず、筆談でないと会話できない。

・地域行事の誘いにあまり積極的に参加する方ではない。表情の変化が他の方に比べると少ないように思う。

・平成 22 年 1 月に市住を引っ越して娘と同居する予定。

・会話が通じにくいため、やや大きめの声で話をする。

・訪問してチャイムを何度も押しても出て来ない。電話も出ない。近くに娘さんが居られて鍵を持っておられるので、家に入っても何も

表 6　今後の対応(n=45)

・一人暮らし。10 月から引き継ぎ。代わってからまだ慣れないせいか、言葉のやりとりが出来にくい。以前二人暮しの時から関わっている住宅内の方が居り、その方と連絡を取り合っている。少し認知症が出て来ているのか、話が噛み合わない時が多い。ヘルパーさんも朝・夕入っているので少しは安心しているが…。

・一人暮らし。10 月から引き継いだばかりで訪問回数が少ないまま、圧迫骨折で入院。連絡が取れず（年末に息子さんが世話に帰っておられたが）、電話番号も分からず連絡が取れていない。

・一人暮らし。10 月から引き継ぎ。今は小康状態で退院し、自宅で生活し、意欲旺盛で希望を持っており、元気に生活している。訪問したり、電話等で見守っていきたい。友人もたくさんいるらしく、このまま元気な日々を願っている。

・一人暮らし。あまり活気のある人ではないが、時々訪ねて世間話をしている。少し耳が聞こえにくくなっているので、外出が少なくなっていくが心配？

・一人暮らし。友達も多く、外出も多いが、近くに住む息子夫婦とうまくいかず落ち込むことがあるので、その辺を気を付けながら訪問するようにしている。

・一人暮らし。痛いところは複数あるが、とても頑張り屋さんであまり心配はないが、頑張り過ぎてリハビリ業が後退する事もあり、時々入院しているが、あまり心配はしていない。

・一人暮らし。昨年 11 月息子さんの近くのマンションに引っ越してきたばかりで、お付き合いも浅い。しかし、引っ越してきたわけも話して下さり、お付き合いがしやすい方で安心している。息子さんや家族の方が毎日のように来て下さるようなので、このままで行こうと思っている。

・夫婦がお年なので、奥さんは病気で病院通いをしている。ヘルパーさんはいらない。息子・娘さんが買い物をしている。

・デイサービスに行って喜んでいる。ヘルパーさんも来てもらっている。

・昼食を持って来てもらう手続きをしている。A 医院に通っておられる。

・よく出掛けていらっしゃる。

チェックシート基本編記入後、「あなたはどのように対応したいと考えますか」との項目については「普段どおり、挨拶や声掛け」、「訪問・電話」が 19 人 42.2%と最も多く、次いで「無回答」7 人 15.6%であった（表６）。

表6　今後の対応（n＝45）

項　　目	人数(%)
普段どおり、あいさつや声かけ	19(42.2)
訪問･電話	19(42.2)
地域包括へ相談	0(0)
その他	0(0)
無回答	7(15.6)
計（2 名複数回答）	45(100.0)

3) 詳細編チェック項目

見守りチェックシート詳細編Aのチェック項目の回答結果は、表7のとおりである。各項目の詳細については、表7のとおりであった。「正月3が日は誰とも過ごしていない、一人だった」については、10人のうち3人が「はい」と答えている。

表7 詳細編A 観察・会話によるチェック項目の回答結果(n=10)

項　　目	はい	いいえ	わからない	無回答	計
自分で家内を移動できない(杖、車椅子を含む)	0	10	0	0	10
転倒や事故などにあった	1	8	1	0	10
閉じこもり(外出週1回以下)	1	8	0	1	10
買物ができない	1	9	0	0	10
最近頼りになる家族の死(2ヶ月間)に遭遇	0	7	3	0	10
最近転居、長期入院から退院した	0	8	2	0	10
同居でも毎日本人は弁当購入	0	7	2	1	10
屋外に長時間一人でいる	0	10	0	0	10
食事が摂れていない	0	8	1	1	10
家事が出来てない	0	6	3	1	10
経済的に苦しい (収入なし、家族が失職・金銭搾取等されている)	1	8	1	0	10
必要な福祉サービスを中断・利用していない	1	6	3	0	10
家族との接触少ない (昼間独居、同居家族と必要最低限の会話)	2	2	4	2	10
正月3が日は誰とも過ごしていない、一人だった	3	1	4	2	10
眠れない、不安や心配事などがありますか	1	0	7	2	10

詳細編 B のチェック項目の回答結果は、特定健康診査チェック項目より抜粋したうつ状態をチェックする項目で、網掛け部分に○がついている数で判断、対応となっている(0 個⇒ふだんどおりあいさつや声をかける、1 個⇒訪問したり、電話をかけて様子をみる、2 個以上⇒地域包括支援センターに相談)。○がついているのは、いずれも各項目の網掛け部分であり、網掛け項目の○数は 0 個が 1 人であった(表 8)。

表 8　詳細編 B チェック項目の回答結果(n=3)

項　　目	はい 人数(%)	いいえ 人数(%)	わからない 人数(%)	無回答 人数(%)	計 人数(%)
毎日の生活が充実していますか	1	0	0	0	1
これまで楽しんでやれていたことが今も楽しんでできていますか	1	0	0	0	1
以前は楽にできていたことが、今ではおっくに感じられますか	0	1	0	0	1
自分は役に立つ人間だと考えることができますか	1	0	0	0	1
わけもなく疲れたような感じがしますか	0	1	0	0	1

詳細編Cに関しては、認知症が疑われるサインに関する項目で、15項目となっている。詳細C項目の中で、「はい」に○をした項目は、0項目であった。また、「わからない」との回答が多かったのは、「薬の飲み忘れ、飲み過ぎが目立つ」、「最近の出来事が思い出せない」の2項目で3人中3人、「同じ食品・品物を何度も買っている」、「怒りっぽくなった」、「腐ったものと新鮮なものの区別がつかない」の3項目で3人中2人であった。

表9　詳細編Cチェック項目の回答結果(n=3)

項　　目	はい	いいえ	わからない	無回答	計
服装や髪の手入れにかまわなくなった	0	3	0	0	3
よく道に迷い帰宅できない、歩き回り不審がられる	0	3	0	0	3
鍵などの大事なものの置き忘れ、しまい忘れが目立つ	0	3	0	0	3
日時をよく間違う、約束を全く忘れている、ゴミの日をよく間違う	0	2	1	0	3
計算が出来ない(財布が小銭で一杯、札のみ支払う)	0	2	1	0	3
同じことを何度も言ったり、聞いたりする 話したばかりの内容を忘れる	0	3	0	0	3
通帳・財布などを盗まれたと騒ぐ	0	2	1	0	3
夜中に平気で外出・活動する 近隣のチャイムをよく鳴らす	0	3	0	0	3
ゴミの出し方が分からない ゴミの口がきっちり結べない	0	3	0	0	3
入浴を極端に嫌がる・身体の汚れが目立つ	0	3	0	0	3
同じ食品・品物を何度も買っている	0	1	2	0	3
怒りっぽくなった	0	1	2	0	3
薬の飲み忘れ、飲み過ぎが目立つ	0	0	3	0	3
腐ったものと新鮮なものの区別がつかない	0	1	2	0	3
最近の出来事が思い出せない	0	0	3	0	3

その他気になることについては、「気になることがある」と答えていたのは0人であった。

表 10-1 チェックシート項目の「はい」に○のついている事例

No.	年齢	世帯の状況	身体不自由	緊急連絡先	見守りが必要な対象者の状況	今後の対応
1	70	単身	左足全体が痛くて歩くのがつらい。	兄	・近くのスーパーへ買い物に行くのも自転車を杖代わりに押して行っている。 ・脊椎狭窄と言われており、鎮痛剤を服用しながら経過観察中。 ・心臓も悪く、不整脈もあり、現在1人で何とかやっているが、持病が悪化した場合が心配。 (はいに○のある項目:閉じこもり、買い物ができない、経済的に苦しい)	普段どおり挨拶や声をかける
3	91	単身	聴力低下	娘	・耳が遠くて会話が通じにくい。 ・足が相当弱っているようで、室内でも物につかまりながら伝い歩きをしている。 ・週2回ヘルパーに来てもらっており、デイサービスにも行っているようだが、高齢なので1人で居る時が心配。 (はいに○のある項目:会話が通じにくい)	訪問したり、電話をかけて様子をみる
16	76	単身	脚が相当弱っている	息子	・普段は元気そうに見えるが、血圧が急に上がったり、眼圧が高い。 ・最近、踏み切り内でバイクを押していてアクセルをふかして転倒し怪我をした。 (はいに○のある項目:転倒や事故などにあった、正月3が日は誰とも過ごしていない)	普段どおり挨拶や声をかける

表 10-2 チェックシート項目の「はい」に○のついている事例

No.	年齢	世帯の状況	身体不自由	緊急連絡先	見守りが必要な対象者の状況	今後の対応
17	77	単身	なし	娘	・以前から悪かった耳に膿が溜まって、鼓膜が倒れていて聴力が一層悪くなる。入院したので少しは回復しているが、補聴器をつけていてもすっきりしない。 (はいに○のある項目:会話が通じにくい、正月 3 が日は誰とも過ごしていない)	普段どおり挨拶や声をかける
18	78	高齢夫婦	聴力低下	近隣	・夫が心筋梗塞で入院し、毎日付きっきりで何度か倒れる事もあった。 ・一人暮らしの不安と神経痛が出てきた。 (はいに○のある項目:最近姿を見ない、無気力又は無表情、家族との接触が少ない、眠れない)	訪問したり、電話をかけて様子をみる
19	89	高齢夫婦	なし	不明	・妻が施設に入所している。認知症もあるらしいが、週 1 回ぐらいは通っている。 ・耳が遠いのに、一人暮らしなので補聴器を外していて、殆ど聞こえず、筆談でないと会話できない。 (はいに○のある項目:最近姿を見ない、家族との接触が少ない、正月 3 が日は誰とも過ごしていない)	普段どおり挨拶や声をかける

表 10-3 チェックシート項目の「はい」に○のついている事例

No.	年齢	世帯の状況	身体不自由	緊急連絡先	見守りが必要な対象者の状況	今後の対応
25	85	単身	聴力低下	不明	・会話が通じにくいため、やや大きめの声で話をする。 (はいに○のある項目:会話が通じにくい)	訪問したり、電話をかけて様子をみる
31	77	単身	なし	娘	・訪問してチャイムを何度も押しても出て来ない。電話も出ない。 ・近くに娘さんが居られて鍵を持っておられるので、家に入っても何も話さない。言うことを聞かない。 (はいに○のある項目:ポストの郵便・新聞、雨戸閉まりっぱなし、最近姿を見ない、必要な福祉サービスを中断・利用していない)	訪問したり、電話をかけて様子をみる
32	92	単身	なし	息子	・(民生委員を)代わってからまだ慣れないせいか、言葉のやりとりが出来にくい。 ・以前二人暮しの時から関わっている住宅内の方が居り、その方と連絡を取り合っている。 ・少し認知症が出て来ているのか、話が噛み合わない時が多い。ヘルパーさんも朝・夕入っているので少しは安心しているが…。 (はいに○のある項目:会話が通じにくい)	訪問したり、電話をかけて様子をみる

2) 見守りチェックシートへの意見

(1)利点

見守りチェックシートを用いることの利点として、以下のような意見が聞かれた。

・チェックシートはあった方がポイントが分かりやすいのでよい。

・チェックシートがあることで今までとは違う視点で、対象者のお宅に行くことができる。

・地域包括支援センターに連絡しないといけないかどうか、あるいは見守る回数を一回でも増やせば済むのか、そういう判断する資料にもなる。

・チェックシート使いやすかったというところは、「この人どうだったかな」と振り返って思い出すときに役立ったし、知らなかったことを知るために役立ったし、知るきっかけにもなった。

・今回のチェックのための訪問で必要性を感じそれがきっかけとなり、地域の見守りシステムである「あんしんシステム」につながった。

(2)問題点

見守りチェックシートを用いることの問題点として、以下のような意見が聞かれた。

・見守りチェックシートを用いての把握のために見守り相手の家に行く、というのは難しい。何か食事会なり、お誘いで行った時に、世間話で出来るかも知れないが、何も目的なく、見守りのお宅にお邪魔するのは難しい。

・(チェック項目への書きにくさとして) しんどい面もありました。そのしんどい面はどうしたかと言われれば、自分の感触で丸をつけている。

・何となく見守っているだけでこれを判断するのは難しいから、おおかた「いいえ」にしてしまう。

・家の中に入ったらある程度把握ができるが、外や玄関先とかでは把握しにくい。

・直接見に行かないといけない項目が多く、自分のすぐ近くならば分かるが、ちょっと遠いところになると分からない。

・対象者の心を開く、そしてこの例題に入っていく、そういう前座をチェックシートにつけてもらえたらもっと中身の濃いチェックシートができると思う。

・チェックシートを直接相手に見せるとよくない。自分で覚えていかないといけないが全部把握するのは難しい。チェックシートの項目を3つ4つ聞き出すというのならできる。

・(チェックをする基準について) 例えば「カーテンが閉まりっぱなし」、「玄関が散らかっているようだ」と、ここまで極端だと、事が大きすぎるというか、「ここまでいかないけど」という人が「いいえ」になると、全然大丈夫なのか、そのあたりがちょっと分かりにくい。

・備考欄をつくり、これに当てはまらないことがあれば記入しておくとよいのではないか。

2. グループインタビュー調査結果

1) 見守り組織の活動

(1)活動の現状

高齢者虐待の事例を通して語られた、A 地区における見守りネットワークの取り組み状況として、以下の意見が聞かれた。

・我々自身が地域で気になる方に気がつくとどこかに相談する。見守りネットワークの定例会が二ヶ月に一度あるので、一応相談を持ちかけることは出来る。

・地域包括支援センターへの連絡、家族や親戚からもご意見を聞く。

・民生委員ばかり頭かかえていても何もならない。やはり地域全体で見守っていくような方向付けを定例会など日ごろからしていく。

・病院から紹介されたケアマネジャーさんが、「民生委員さんは誰ですか」と市役所で聞かれてうちに来られた。それで、「見守ってください」と。(入院中の住民の退院時に病院のケースワーカーから民生委員に相談があった事例)

(2)活動の課題

高齢者虐待の事例を通して語られた、A 地区における見守りネットワークの課題として、以下の意見が聞かれた。

・本人や家族から助けを求められたら入りやすいが、求められなかったら、なかなかこちらからは入りづらい。

・民生委員としての見守りは荷が重い。

・同居家族に息子など若い者がいると関わりにくいし、関わる対象から外れてしまう。

・個人情報の壁があり、情報を共有しにくい。

・例えば徘徊しているのは近所の人が見ていても、お金に困っているとは分からない。

・隣人の様子もわからなくなっている。近隣の付き合いが乏しくなっているのが問題である。

(2)課題への対応

A 地区における見守りネットワークの課題に対する対応として、以下の意見が聞かれた。

・地域の見守り組織について高齢者がいる世帯に周知する。

・民生委員に相談したらいい、ということを住民に周知する。

2)組織育成プログラム

(1)研修への意見

研修を行うことに対しては以下の意見が聞かれた。

・(少人数のグループワークという) こういう形式のほうが、皆さんがどう思われているのか勉強になります。ただ自分が考えてきて「こうです、ああです」よりも、むしろグループで意見を出し合うことで次回にも生かせることができる。

・大勢の前で話すより、こういう小さい中で話すほうが、自分の考えを話しやすい。

第4章　考　察

1. 見守り対象

見守りチェックシートに記入した見守りを必要とする対象者の年齢は、80 歳代が 52%と最も多く、次いで 70 歳代の 40%、90 歳代の 7%であった。A 地区の見守りネットワークの見守り対象は高齢者としており、それが反映されたと考えられる。また、見守りを必要とする対象者の世帯は、一人暮らしが 84%と最も多く、高齢世帯は 4 人 9%、子と 2 人の世帯は 2%であった。わが国は高齢化が進み、その家族構成としては、国立社会保障・人口問題研究所の日本の世帯数将来推計[1]によると、単独高齢者世帯や高齢者夫婦世帯の増加が今後も見込まれており、地域の見守りの対象としても概ね単独高齢者世帯や高齢者夫婦世帯が中心となっている。しかし、今回のグループインタビューからは「同居家族に若い者がいると関わりにくく、関わる対象から外れてしまう。」という意見が聞かれ、見守りの必要性を感じていながらも見守り対象に含めにくい実態が明らかとなった。

平成 19 年度高齢者虐待の防止、高齢者の養護者に対する支援等に関する法律に基づく対応状況等に関する調査結果[2]によると、高齢者虐待の加害者は、息子が 40.6%で最も多く、単独高齢者世帯や高齢者夫婦世帯のみならず必要性のある世帯を見守り対象とする必要性があると考えられる。また、被災地においての報告では、40 歳代、50 歳代、60 歳代の男性の孤立死が高齢者の孤立死を上回っていた[3]と報告されている。年齢においても 65 歳の高齢者で区切らず、支援が必要な若年層の見守りのあり方が課題となる。

見守り対象者の身体不自由の有無については、「あり」は 39.5%、「なし」は 60.5%であった。身体的な不自由さがなくても見守りの対象としていた。身体不自由の内容としても聴力や視力と日常生活やコミュニケーションに密接した不自由さがあげられていた。

2. 見守りの課題

「民生委員としての見守りは荷が重い。」という意見が聞かれたが、先行研究においても対応困難な訪問世帯が抱える主な課題として、認知症高齢者の問題行動や精神疾患、閉じこもりがあげられており[4,5]、対応が困難な事例や荷が重いと感じる場合は見守りのネットワークを生かし、地域包括支援センター等に声をかけ、専門職を含めたチームで対象者および民生委員等の見守りネットワークメンバーを支援する必要があると考える。

内閣府の高齢者の生活と意識に関する国際比較調査によると、子どもと「いつも一緒に生活できるのがよい」という回答は 1980 年代には 59.4%であったものが 2005 年には 34.8%と減少し、[6]家族間の関係も希薄となっている。近隣との関係についても、内閣府の国民生活選好度調査によると、近所に「互いに相談したり日用品の貸し借りをするなど、生活面で協力し合っている人」が一人もいない人は 65.4%と全体の役 2/3 を占めており[7]、その希薄化が顕著である。グループインタビューにおいても、「近隣の付き合いが乏しくなっている。」ことに関しての見守りの困難さがあげられた。また、「本人や家族から助けを求められなかったら、なかなかこちらからは入りづらい。」という意見も聞かれた。孤立しつつも支援を望まない高齢者も増加しているため、マン

ションなどの集合住宅の多い都市部、その中でも社会的な支援を望まない孤立した中・高年者の孤立死が増加している[8]と指摘されており、希薄な社会で孤立した対象への支援の難しさが浮き彫りとなった。

さらに、個人情報の壁があり、情報を共有しにくい。」、との意見が聞かれたが、この困難さは、被災地での調査においても報告されており、地域住民による見守り困難であると思われる点として、プライバシーの問題が挙げられていた[4]。個人情報保護は、対象者のプライバシー保護に不可欠であるが支援が必要な対象者の把握や共有を困難にしていると考えられる。

以上のように見守りには困難を伴う中、見守りのネットワークメンバーのみで見守るには限界があり地域全体で見守りを行うことが必要である[8]。孤立死防止の先駆的な取り組みをしている地域においては、孤立死予防のシンポジウムを開き住民に取り組みへの理解を求める活動や、団地内にある市の施設の一角に孤独死予防センターを開設するなどの活動、マスコミによる孤独死報道によって、市民の意識の変化が起こり、孤立死の件数が大幅に減少につながったと述べ[9]住民への啓発活動の必要性を示唆している。

以上から単独高齢者世帯や高齢者夫婦世帯に概ね限定した見守りから支援が必要な者全体への対象の見直し、見守りを望まない対象への積極的な関わりの困難さや地域の関係の希薄さが語られる中、見守りや相談機関の周知をはじめ地域住民へ全体への啓発活動の重要性が示唆された。

第5章　まとめ

1．組織育成研修プログラムの実施結果と課題

高齢者虐待の事例を通して語られた、A 地区における見守りネットワークの取り組み状況として、「我々自身が地域で気になる方に気がつくとどこかに相談する。見守りネットワークの定例会が二ヶ月に一度あるので、一応相談を持ちかけることは出来る。」、「地域包括支援センターへの連絡、家族や親戚からもご意見を聞く。」「民生委員ばかり頭かかえていても何もならない。やはり地域全体で見守っていくような方向付けを定例会など日ごろからしていく。」との意見が聞かれ、日ごろの活動から地域での見守り体制が整っていることが示された。また、「病院から紹介されたケアマネジャーさんが、『民生委員さんは誰ですか』と市役所で聞かれてうちに来られた。それで、『見守ってください』と。」と、入院中の住民の退院時に病院のケースワーカーから民生委員に相談があった事例も紹介された。

課題としては、「本人や家族から助けを求められたら入りやすいが、求められなかったら、なかなかこちらからは入りづらい。」、「同居家族に息子など若い者がいると関わりにくいし、関わる対象から外れてしまう。」、「個人情報の壁があり、情報を共有しにくい。」、「例えば徘徊しているのは近所の人が見ていても、お金に困っているとは分からない。」と望まない対象への積極的な関わりの困難さが語られた。また、「隣人の様子もわからなくなっている。近隣の付き合いが乏しくなっているのが問題である。」と地域の関係の希薄さを課題としてあげていた。

課題に対する対応として、「地域の見守り組織について高齢者がいる世帯に周知する。」、「民生委員に相談したらいい、ということを住民に周知する。」と見守りや相談機関の周知等の啓発活動

の重要性に関する意見が聞かれた。

2. 見守りチェックシートの試行状況と課題

見守りを必要とする対象者の年齢は、80 歳代が 52%と最も多く、次いで 70 歳代の 40%であり、後期高齢者を中心に見守りの対象としていた。見守りを必要とする対象者の世帯は、一人暮らしが 84%と最も多く、高齢世帯は 9%であり、1 人暮らしのみを対象とはしていなかった。

見守りチェックシート基本編のチェック項目の回答では、「会話が通じにくいと感じる」の項目が最も多く 11.6%であり、次いで「最近姿を見ない。物音がしない」の項目が 7.0%であった。詳細編 A は、においても、「気になっていること」の具体的な内容には、「食品などの買い物に行く以外は、殆ど家に閉じこもっているようである。膝関節が悪いそうで、近所付き合いもあまりしていないようなので、緊急時が心配」、「耳が遠くて会話が通じにくい。足が相当弱っているようで、室内でも物につかまりながら伝い歩きをしている。週 2 回ヘルパーに来てもらっており、デイサービスにも行っているようだが、高齢なので 1 人で居る時が心配」と記述が多く、チェックシートに収らない個々の状況がつづられていた。

グループインタビューにおいてのチェックシートへの意見としては、まず、「見守りチェックシートを用いての把握のために見守り相手の家に行く、というのは難しい。何か食事会なり、お誘いで行った時に、世間話で出来るかも知れないが、何も目的なく、見守りのお宅にお邪魔するのは難しい。」と見守りの対象への訪問の難しさがあげられた。次に、チェック項目への書きにくさ「しんどい面もありました。そのしんどい面はどうしたかと言われれば、自分の感触で丸をつけている。」「何となく見守っているだけでこれを判断するのは難しいから、おおかた「いいえ」にしてしまう。」という意見があった。また、「家の中に入ったらある程度把握ができるが、外や玄関先とかでは把握しにくい。」、「直接見に行かないといけない項目が多く、自分のすぐ近くならば分かるが、ちょっと遠いところになると分からない。」との意見が聞かれた。

訪問に際し「対象者の心を開く、そしてこの例題に入っていく、そういう前座をチェックシートにつけてもらえたらもっと中身の濃いチェックシートができると思う。」と見守り訪問時におけるコミュニケーション方法についての要望もあった。

また、チェック項目の量については、「チェックシートを直接相手に見せるとよくない。自分で覚えていかないといけないが全部把握するのは難しい。チェックシートの項目を 3 つ 4 つ聞き出すというのならできる。」との意見が聞かれた。

チェックをする基準については、「例えば『カーテンが閉まりっぱなし』、『玄関が散らかっているようだ』と、ここまで極端だと、事が大きすぎるというか、『ここまでいかないけど』という人が『いいえ』になると、全然大丈夫なのか、そのあたりがちょっと分かりにくい。」、「備考欄をつくり、これに当てはまらないことがあれば記入しておくとよいのではないか。」との回答があった。

一方、今回のチェックのための訪問で必要性を感じそれがきっかけとなり、地域の見守りシステムである「あんしんシステム」につながった事例もあった。

また、チェックシートを用いる利点も聞かれた。「チェックシートはあった方がポイントが分か

りやすいのでよい。」、「チェックシートがあることで今までとは違う視点で、対象者のお宅に行くことができる。」、「地域包括支援センターに連絡しないといけないかどうか、あるいは見守る回数を一回でも増やせば済むのか、そういう判断する資料にもなる。」、「チェックシート使いやすかったというところは、『この人どうだったかな』と振り返って思い出すときに役立ったし、知らなかったことを知るために役立ったし、知るきっかけにもなった。」ということであり、見守りの際の判断基準となり、社会資源につなげるきっかけとなっていた。

3. 本年度の結論

見守りチェックシートに関しては、簡便かつ個別性を捉えられる見守りのチェックシートの確立と見守り訪問時のコミュニケーション方法をチェックシートに記載することへの要望等をふまえた見守りチェックシートの見直しの必要性が明らかになった。また、見守りについては、単独高齢者世帯や高齢者夫婦世帯に概ね限定した見守りから支援が必要な者全体への対象の見直し、見守りを望まない対象への積極的な関わりの困難さや地域の関係の希薄さが語られる中、見守りや相談機関の周知をはじめ地域住民へ全体への啓発活動の重要性が示唆された。

文　献

1）国立社会保障・人口問題研究所．日本の将来推計人口．平成 20 年 12 月推計分．

2）厚生労働省．厚生労働省：平成 19 年度　高齢者虐待の防止、高齢者の養護者に対する支援等に関する法律に基づく対応状況等に関する調査結果．平成 19 年．

3）伊佐秀雄．阪神淡路大震災被災者医療の 10 年．

4）神戸市．「地域見守り支援者アンケート」報告書．平成 17 年．

5）財団法人日本公衆衛生協会．支援困難事例対応マニュアル報告書．平成 17 年．

6）内閣府．高齢者の生活と意識に関する国際比較調査．平成 17 年

7）内閣府．国民生活選好度調査．平成 18 年．

8）佐々木とく子、NHK スペシャル取材班．ひとり誰にも看取られず一激増する孤立死とその防止策．阪急コミュニケーションズ．平成 19 年．

9）元木昌彦．孤独死ゼロの町づくり．ダイヤモンド社．平成 20 年．

厚生労働科学研究費補助金

政策科学総合研究事業

高齢者等のセルフ・ネグレクト（自己放任）を防ぐ地域見守り組織のあり方と見守り基準に関する研究
＜大阪府堺市西区地域包括支援センター＞

―平成 21 年度継続調査(2 年目)報告―

目　次

研究組織 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

第1章　調査地区の概要 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2

第2章　本研究における本年度の取り組み・・・・・・・・・・・・・ 6

第3章　調査結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 10

第4章　まとめ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・28

平成 21 年度　分担研究報告書《NO　3》

分担研究者　臼　井　キ　ミ　カ

平成 22（2010）年 3 月

研究組織

〈本報告書作成者〉

分担研究者：臼井キミカ（大阪市立大学　教授）

研究協力者：佐瀬美恵子（甲南女子大学看護リハビリテーション学部　准教授）

上村　敬子（堺市西区地域包括支援センター　所長・保健師）

山田真紀子（堺市南区地域包括支援センター　社会福祉士）

田中　美智（堺市南区地域包括支援センター　主任介護支援専門員）

渡辺　隆一（堺市南区地域包括支援センター　社会福祉士）

研究組織構成メンバー

研究代表者：津村智恵子（甲南女子大学看護リハビリテーション学部　学部長）
臼井キミカ（大阪市立大学大学院看護学研究科　教授）
河野あゆみ（大阪市立大学大学院看護学研究科　教授）
和泉　京子（大阪府立大学看護学部　准教授）
山本　美輪（明治国際医療大学看護学部看護学科　講師）
大井　美紀（甲南女子大学看護リハビリテーション学部　准教授）
川井太加子（桃山学院大学社会福祉学部社会福祉学科　准教授）
金谷　志子（大阪市立大学大学院看護学研究科　講師）
枡田　聖子（甲南女子大学看護リハビリテーション学部　助教）
上村　聡子（甲南女子大学看護リハビリテーション学部　助手）
前原なおみ（甲南女子大学看護リハビリテーション学部　助手）
鍛治　葉子（甲南女子大学看護リハビリテーション学部　助教）

第１章　調査地区の概要

1．調査地区概要

1）調査地区の状況

<table>
<tr><td>市町村名</td><td colspan="3">大阪府堺市西区</td></tr>
<tr><td>人口(H22.2 月現在)</td><td>人口：133,683 人
男性：64,601 人
女性：69,082 人</td><td>65 歳以上人口(高齢化率)
(H22.2 月現在)</td><td>29,027 人(21.3%)
男性：12,482（18.8%）
女性：16,545（23.7%）</td></tr>
<tr><td>調査地区の包括支援センターの専門職</td><td colspan="3">西区地域包括支援センターの職員は、下に示したように総勢 12 名であり、常勤は 9 名、非常勤別 3 名である。
所長　：1 名（保健師・常勤）
主任介護支援専門員：1 名（看護師・常勤）
社会福祉士　：2 名（社会福祉士・常勤）
看護師他　：6 名（常勤 5、非常勤 1）
事務　：2 名（派遣）</td></tr>
<tr><td>見守り組織の名称、数（人数）</td><td colspan="3">見守り組織の名称：堺市西区高齢者ちょこっとネット
現在は見守り組織構築中であり、それに関わる組織の人数は流動的であり、明確な人数は計上できない。</td></tr>
<tr><td>見守り活動の状況</td><td colspan="3">現在の見守り組織として、いきいきサロン、ボランティアビューロー、「お元気ですか」訪問活動、「セイフティーネット」訪問活動等があげられる。その活動の概要を以下に記載する。平成 22 年 2 月末校区別概況を表 1 に示した。
① いきいきサロン：地域の民生委員、ボランティア、校区福祉委員が中心となって、高齢者が集える場所を提供している。地域の公民館等を利用しており、開催頻度は月に 1 回程度、内容は喫茶、昼食会、季節の行事などである。
② ボランティアビューロー：民生委員と自治連合会が中心となって、高齢者に対する相談を担当している。会場は地域の公民会などを利用しており、開催頻度は月 1 回程度である。平成 20 年に開始された事業であるため,全校区が対象ではないが殆どの校区に広まりつつある。
③ セイフティネット訪問：平成 20 年 12 月に開始した「お元気ですか」訪問では、民生委員が地域の独居高齢者、高齢世帯を対象に月 1 回自宅を訪問し,健康状態や安否確認を行ってきた。また、災害時一人も見逃さない活動では、災害弱者を中心に名簿を作成し、災害時に一人の人も見逃さないように供える活動であるが、地域特性によって活動が難しい校区もあり、活動内容は校区によって差があった。平成 21 年 11 月から開始したセイフティネット訪問は、社会福祉協議会が呼びかけ、民生委員が中心となって行う訪問活動であり、対象者は要援護者、今回は特に各種サービスを全く受給していない人をリストアップして実施した。対象者数は全市で約 1 万人、西区では約 1,700 人であったが、訪問不能者 327 人であった。訪問の結果、訪問が不要であることが判明した人は約 700 人であった。</td></tr>
</table>

表１　校区別概況（平成 22 年 2 月末現在）

A	浜寺 石津	鳳南	平岡	浜寺	津久野	福泉	浜寺東	上野芝	福泉東	浜寺 昭和	向丘	福泉上	鳳	家原寺
B	11,689	15,961	5,765	9,868	8,126	15,123	8,372	9,263	3,327	11,991	10,733	7,389	13,714	4,862
C	5,839	6,793	2,449	4,338	3,427	5,870	3,539	3,843	1,661	4,818	4,316	2,950	5,938	2,243
D	22	17	10	10	10	16	18	10	5	23	13	12	21	10
E	2,940	2,760	1,568	2,419	1,608	2,886	1,829	2,040	792	2,237	2,594	1,486	2,748	1,120
F	11.4	16.7	12.7	13.4	15.6	18.4	14.6	14.5	14.9	17.7	13.9	16.7	14.9	15.2
G	63.5	66.0	60.1	62.0	64.6	62.5	63.5	63.4	61.3	63.6	61.9	63.1	65.0	61.8
H	25.2	17.3	27.2	24.5	19.8	19.1	21.8	22.0	23.8	18.7	24.2	20.1	20.0	23.0

注)A:校区福祉委員会名,B:校区人口,C:世帯数,D:町会数,E:65 歳以上人口，人口構成比(%)F:0-14 歳,G:15-64 歳,H:65 歳以上

4）高齢者の組織(地域包括を中心とした連携を示す見守り組織図)

高齢者の地域包括支援センターを中心とした連携を示す活動については，組織図に示されるような段階に至っていない。

5）地域包括支援センターの活動概況(平成 20 年から 21 年の概況)

①支援センター連絡会：地域包括支援センターと在宅介護支援センターとの業務連絡会であり、高齢者総合相談支援業務の調整、協働事業の議場の業務検討会等を行っている。平成 20 年度の開催数は 24 回である。

②高齢者にかかわる地域ネットワーク会議：地域の団体やボランティア等と連携しながら、地域資源情報や地域支援の必要な高齢者の検討、地域住民による支え合いや助け合いなどの地域福祉活動への支援を地域包括支援センターが参画し、地域高齢者を取り巻く課題を検討していく場である。西区では「西区高齢者ちょこっとケットワーク」という名称であり、開催回数は平成 21 年 1 月から現在まで事務局会議を 6 回、運営企画委員会を 6 回開催した。

④ 処遇困難事例への対応：処遇困難事例等に対して、支援関係者がケースカンファレンスを行い、効果的な介護予防/生活支援サービスの総合調整などを行っている。平成 20 年度の相談件数は、権利擁護関係 35 件、成年後見関係 197 件、虐待関係 345 件であり、それぞれの件数が堺市全市の件数に占める割合は権利擁護関係 5.4%（652 件中）、成年後見関係 38.0%（519 件中）、虐待関係 20.5%（1,682 件）であった。なお、虐待対応件数は 33 件（実数）であり、堺市全体に占める割合は 24.6%（134 件）であった。

2．地域見守り組織の本年度の活動状況

1．地域見守り組織における本年度の取り組み

昨年度に引き続き虐待防止ネットワーク事務局と高齢者虐待防止ネットワーク企画運営委員会の活動を推進してきた。各メンバー数は以下のとおりである。

ａ：高齢者虐待防止ネットワーク事務局（9 名）

在宅介護支援センター：3 名

グループホーム職員　：2 名（管理者、看護師）

地域包括支援センター：4 名（所長 1、社会福祉士 2、主任介護支援相談員 1）

b：高齢者虐待防止ネットワーク企画運営委員会（20名）

在宅介護支援センター、医療機関、居宅介護支援事業所、各介護保険サービス事業所（訪問介護、訪問看護、通所介護、老人福祉施設、老人保健施設、グループホーム）、民生委員、社会福祉協議会、各行政機関（地域福祉係、保健センター）

1) 見守り組織育成に向けた取り組み

(1)取り組み状況

①実施状況

堺市西区では,住み慣れた地域で高齢者が安心して暮らせるまちづくりを目指して、支援者の更なるスキルアップを図り、研修会を通してネットワークを構築することを目的にして、以下の 3 点を具体的な目標を掲げて活動している。

・**支援者のスキルアップ**：認知症に関連する知識を多面的に深めることにより、地域のニーズや課題に対応できる力をつける。

・**ネットワーク構築の方法論を学ぶ**：ネットワークを形成している市町村から成果や課題を学び、私たちの地域には何が必要かを見極め、ネットワークを形成するための方法論を学ぶ。

・**ネットワーク構築に向けての模擬実践**：毎回課題を出して,具体的なネットワーク構築の実践に取り組んでもらう.将来的には、在宅介護支援センターを中心としたネットワークが小学校区単位、もしくは地域の実情に合わせて中学校区単位のネットワークを地域に根付かせる。

研修会の対象は「高齢者を支援する住民の皆様」であり、具体的には医師会、民生委員、校区福祉委員、自治会、介護者家族、ボランティア、医療機関、居宅介護支援事務所、各介護保険サービス事業所（訪問介護、訪問看護、通所介護）、社会福祉協議会、各行政機関、在宅介護支援センターなどの職員や意志表明をされた住民の皆様である。対象人数としては約 100 人から 140 人程度として、その人達と共に,高齢者を抱える社会的な課題やネットワークの必要性について学ぶ。研修会の企画を担当しているのは「堺市西区高齢者ちょこっとネット企画委員会」であり、介護保険事業者からと地域包括支援センターの職員を加えた総勢 14 名である。研修に合わせて適宜企画会議をもち、さらに研修会実施後には文字と写真で研修会の様子について詳細に説明を加えた「ちょこネット便り」を発行している。

平成 21 年 1 月からは 6 回シリーズで「高齢者見守りネットワークづくり」をテーマに、特に認知症に関する理解を深め、さらに高齢者を見守るための地域の実情に即したまちづくりに取り組んできた。今年度も前年度と同様に毎回の講演会の後には,小学校区単位でグループワークを実施しており、「講演内容を聞いてどう感じたか」「私たちのまちにはどんなネットワークが必要か」など有意義な研修会になるよう工夫している。グループにはさまざまな立場の人が参加しているので、バラエティに富んだ意見交換がなされている。

②スタッフ

堺市西区高齢者ちょこっとネット企画委員会のメンバーは、総勢 28 人であり、その内訳は通所介護、訪問介護、医療機関、特別養護老人ホーム、グループホーム、在宅介護支援センター等の代表の他、地域福祉係、保健センター、社会福祉協議会等の代表等で構成している。事務局は地域包括支援センターは勿論のこと、在宅介護支援センターやグループホーム等の代表が担っている。

③内容

高齢者見守りネットワーク研修会の具体的な内容と参加者数を表２に示した。なお、第３回は市民向け研修として対象は堺市地域包括支援センター、在宅介護支援センター、堺市西区内の市民、民生委員、校区福祉委員、自治会、婦人会、老人会、介護者家族の会、ボランティア、介護保険関連事業所・施設、医師会、病院関係、社会福祉協議会、行政などに広く呼びかけた。

④参加状況

参加者数は表２に示した。なお、各回のテーマの目的等については、以下のとおりである。

第１回：認知症介護者や当事者の体験談を聞き、認知症への理解を深める。また、講演後には「万一、私が認知症になったら？」というテーマでグループワークを行った。

第２回：現代社会において、専門職や地域住民が協働してまちづくりを行うことの意味や必要性を学ぶことを目的としたが、第２回は特にハード面にポイントを置いて実施した。

市民研修：医学的な視点からの BPSD の理解、介護者の苦悩など,当事者や家族をどう支援していくかを学ぶことを目的として実施した。

第３回：ネットワーク形成の過程・発展やそれに伴う問題点などを講演してもらい、自分たちの地域で何ができるかを学ぶことを目的としている。また、認知症に関する最新の動きなどを紹介した。

第４回：ネットワーク構築の方法や認知症高齢者への支援について新しい視点を学ぶ。そして、自分たちの地域を振り返って,今ある社会資源やネットワークを把握し、ニーズや課題を探ることを目的にした。

第５回：これまで学んできたことや積み上げてきたことを基に、地域に即したネットワークをつくることを目的にした。

第６回：孤立死を防ぐ住民の見守りシステムと地域包括支援センターの活動について、チェックリストを提示し、また DVD 等を用いて理解する。さらに虐待等困難事例への総合支援・対処のシステムのあり方と活動、及びセルフ・ネグレクト等見守りによる早期発見・対処システムについて全国の先進地域から学び、今後の自分達の地域で実践するにはどうすべきかを考えることを目的に実施した。

表２　高齢者見守りネットワーク研修会の概要（平成 21 年１月～22 年３月末）

回数	テーマ・講師	参加者
第１回 21/1/29	「認知症当事者から支援者へのメッセージ」 吉田民治氏（認知症当事者）、吉田照美氏（介護者家族）	141 人
第２回 21/3/5	「ネットワークをこうして作ろう ～高齢者を支えるために、今、私たちにできること～」 久　隆浩氏（近畿大学理工学部社会環境工学科教授）	143 人
市民向け 研修 21/5/27	「認知症高齢者と家族を支えるために」 松本一生氏（松本診療所ものわすれクリニック院長） 対象：堺市　地域包括支援センター、在宅介護支援センター、堺市西区内の市民、民生委員、校区福祉委員、自治会、婦人会、老人会、介護者家族の会、ボランティア、介護保険関連事業所・	300 人